

ラトビア大学における発展的授業の試み ーラトビア紹介動画作成のプロジェクトワークからー

キーワード：教科書中心の授業からの脱却、受け身な姿勢の学生、達成感

要旨

ラトビア大学の大学2年生と3年生、大学院1年生を対象に、ラトビアを紹介する動画作成のプロジェクトワークを通常の授業と並行して、1学期間実施した。結果、まず学生からは、今までこのようなプロジェクトワークをしたことがなかったのも、戸惑いがありながらも、教科書中心の授業とは違い、面白かったという回答が多かった。また、ラトビアのように日本語を勉強しても活かせる場が少ない所では、今回のプロジェクトワークは日本語使用の達成感が多く得られる活動であった。一方、否定的な意見としては、編集が難しかった、グループで集まる時間を作るのが大変だった、などの意見があった。今回のプロジェクトワークの結果が、今後のラトビアにおける日本語教育発展のための新たな可能性を示すものとなったように思われる。

1. はじめに

今まで、ラトビア大学では教科書中心の授業が行われ、受け身な姿勢の学生が多かった。また、卒業後に日本語が活かせる場がなく、日本に留学しない学生は日本語学習に対するモチベーションが急激に下がるという問題があった。それから、ラトビアという国は、まだ日本人にはあまり知られておらず、また日本人とラトビア人が接する機会はあまりなかった。そこで、今回、ラトビア紹介動画作成のプロジェクトワークが、これらの問題を解決するきっかけになると考え、このプロジェクトワークを行うことにした。本稿では、まずラトビア大学の日本語教育について簡単に説明し、その後ラトビア紹介動画作成のプロジェクトワークについてみていく。

2. ラトビア大学

(国際交流基金 online: [latvia.html#contents](http://www.jica.go.jp/latvia.html#contents))によると、1997年にラトビア大学で日本語学科が開設され、そこから統合などにより、現在の形であるラトビア大学人文科学部アジア学科に至る。

ラトビア大学人文科学部アジア学科は、ラトビア国内で日本語が学べる唯一の高等教育機関であり、現在ラトビア大学人文科学部アジア学科で日本語を学ぶラトビア人日本語学習者(学部生・院生)の数は75名ほどである。学生達は、日本語のほかにも、アジア(日本・中国・中東)の文化・歴史・宗教などを幅広く勉強している。日本語にあてる各学年の学習時間は、大学1年生が約220時間、2年生が約200時間、3年生が150時間で、卒業時の日本語レベルの目標は日本語能力試験のN3～N2程度である。大学院生に関しては、1年生は約50時間で、2年生も約50時間である。しかし、大学2年生や大学院1年生は提携している日本の大学に半年～1年ほど留学できるチャンスがあるので、大学2年生は半数が、大学院1年生

は過半数が日本に留学する。また、教材は、大学1年生は「げんきⅠ・Ⅱ」、大学2年生は「げんきⅡ」と「中級へ行こう」と「ストーリーで覚える漢字Ⅱ301～500」、大学3年生は上級へのとびらを使用している。大学院生に関しては決まった教材はなく、学習内容はレポートや論文の書き方や研究発表の仕方の指導などである。そして、これらの日本語のクラスを筆者とラトビア人の日本語教師の二人で受け持っている。

3. ラトビア紹介動画作成のプロジェクトワーク

3.1 経緯

今回、なぜ、このラトビア紹介動画作成のプロジェクトワークを行おうとしたのか、これにはいくつかの理由がある。まず、ラトビアという国が日本人にあまり知られていないということがあげられる。実際、筆者もラトビア大学に赴任する前、ラトビアという国に関して全く知らなかった。また、日系の企業もほとんどなく、そして日本人留学生も少ないので、ラトビア人日本語学習者が日本人と接する機会は非常に少ない。次に、理由として、今までのラトビア大学の日本語の授業が教科書中心の授業で、受け身な姿勢の学習者が非常に多いということがある。最後に、理由として、卒業後に日本語を活かす場がないということで、日本に留学しない学生（2年生～）は日本語学習に対するモチベーションが急激に下がるということがあげられる。以上の問題があり、何か良い案がないかと考えたときに、以前働いていたメキシコで、行われた第1回メキシコプレゼンテーションコンテスト2016を思い出し、そのアイデアを参考にし、今回ラトビア紹介動画作成のプロジェクトワークを行うにあたった（社団法人 メキシコ日本語教師会online: 97-concurso-video-2016-1.html）。

3.2 目標

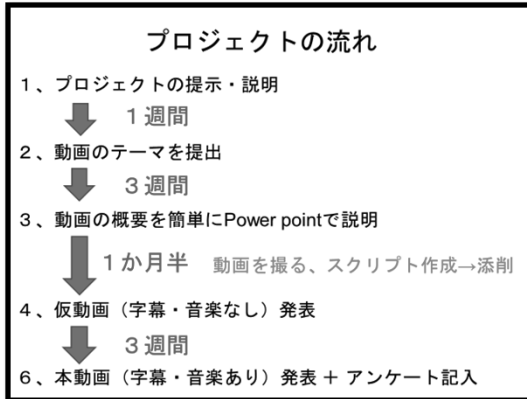
今回のプロジェクトワークの目標は3つある。まず教科書中心の授業スタイルから脱却し、受け身な姿勢の学生を活動的にすること。次に、クラス内だけのコミュニケーションだけではなく、今まで勉強した日本語で動画が作れるようになったと達成感を得てもらうこと。最後に、日本人とラトビア人が繋がれるきっかけを作ることである。

3.3 プロジェクトワークの実践

まず、対象者は、ラトビア大学人文科学部アジア学科で日本語を勉強する学生で、大学2年生（17名、5グループ）、大学3年生（6名、3グループ）、大学院1年生（6名、3グループ）で、1グループは2～4名で構成されている。大学2年生は「げんきⅡ」の17課まで終えた、学習時間が220時間ほどの学生で、大学3年生は「げんきⅠ・Ⅱ」と「中級へ行こう」を終えた、学習時間が420時間ほどの学生で、大学院1年生は「げんきⅠ・Ⅱ」と「中級へ行こう」を終え、学習時間が570時間ほどで、1年間の留学経験がある学生である。次に、プロジェクトワークの内容について説明したい。このプロジェクトワークは通常の授業と並行して、1学期間（2017年9月～2017年12月）実施した。そして、学期末の成績に20%入れた。動画の内容は、日本人に紹介したいことで、ラトビアに関することなら何でもよく、動画に英語字幕や音楽を付けてもらった。

作成した動画はYoutubeやFacebookでアップし、日本人にラトビアを知ってもらうことが目標で作ってもらった。また、在ラトビア日本国大使館のホームページに載せてもらえればということで交渉もしたが、学期の半ばで載せるのは難しいということで、大使館のホームページに載せてもらうことはできなかった。

一学期間のプロジェクトワークの流れは、下記の図のとおりである。



まず、初日に学生にプロジェクトワークの概要を説明し、グループを作ってもらい、その一週間後に、動画のテーマを提出してもらった。そして3週間後に、各グループに動画の概要をパワーポイントで簡単に説明してもらった。次に、1か月半で、動画を撮ったり、スクリプトを作成したり、してもらった。その後、仮動画（字幕なし・音楽なし）の発表をもらい、3週間後に本動画（字幕あり・音楽あり）を発表、そしてアンケート調査を行った。

3.4 アンケート結果

アンケート調査を通して、様々なことがわかった。まず全体で多かった意見として、教室外でグループで集まるのが難しいという意見や、グループだけでなく一人という選択肢もほしかったという意見があった。他には、今までこのようなプロジェクトワークをしたことがなく、教科書ばかりの授業と違い、楽しかったという意見が多かった。次に、学年ごとのアンケート結果を紹介する。

【大学2年生のアンケート結果】

肯定的な意見

- ・ 普段使わないような語彙が使えた。
- ・ 4月に日本に留学するので、留学先で自国紹介として使える。
- ・ 最初はあまりしかなかったが、動画ができてみると満足感があつた。

否定的な意見

- ・ 編集（字幕作成・音楽を付ける）が難しかった。
- ・ 編集などに役立つソフトフェアを事前に教えてほしかった。
- ・ Youtubeにアップするのは著作権（自分たちが使った音楽）が心配。

【大学3年生のアンケート結果】

肯定的な意見

- ・教科書の授業に飽きていたので、面白かった。
- ・日本人の友達がラトビアに来た際、どこを紹介すべきか考えさせられた。

否定的な意見

- ・3年生は卒業論文で忙しい。2年生には良いプロジェクト。
- ・動画を撮る時期が秋や冬だったので、撮りたい動画が撮れなかった。

【大学院1年生のアンケート結果】

肯定的な意見

- ・動画作成や編集の経験は、今後に活かそう。
- ・Facebookに載せたら、日本人の友達に「いいね」をもらえて嬉しかった。
- ・動画の概要をプレゼンする際、聞き手を意識した丁寧体で話さないといけ

ないと気づかされた。留学先の大学では、普通体でプレゼンしても何も注意されなかった。

否定的な意見

- ・仕事が忙しいので、動画を撮る時間が作れない。

また、最後に、このようなプロジェクトワークをしてみたいかという質問に対して、学生は下記のように答えた。

大学2年生76.4% (13/17) 大学3年生33.3% (2/6)

大学院1年生100% (6/6)

上記の結果からわかるように、全体的にみて肯定的で、またしてみたいという声が多かった。

3.5反省・改善点

今回のプロジェクトワークの反省や改善点はいくつかあるが、まず、事前に編集の仕方を説明したり、著作権フリーの音楽や映像を提示することが必要だった。他には、グループによっては作業（字幕作成・音楽を付ける・ビデオを撮りに行く・スクリプト作成）を分担し、日本語を全く使用しない学生もいたので、全員が必ず日本語を使用するように指示すべきだった。また、作成した動画の活かし方もYoutube、Facebook、大使館のHP以外に、どのように効果的に活かせることができるか、今後も課題である。それと、プロジェクトワークを行う時期（論文・試験・季節）選びも大切だとわかった。

4. まとめ

今回、初めて、ラトビア大学でプロジェクトワークを試みたが、予想以上に面白い結果となった。今回のプロジェクトワークを通してわかったことは、まずプロジェクトワーク後に残るもの（作成した動画）があるので、多くの学生に達成感があった。そして、このプロジェクトワークは初級学習者でも行えるものであるとわかった。また、日本語を勉強しても活かせる場がない学生や、教科書ばかりの授業で飽きている学生に対して効果的であった。それから、いつも受け身な姿勢の学生が積極的に活動を行っていた。そして、留学前に行えば、自国について改めて考えるいい機会にもなり、また留学先で自国紹介の際に作成した動画が使えるというメリットがあった。今後の課題としては、作成した動画の効果的な活かし方をもう少し考える必要がある。